

「歴史を物語るファクト」

実践女子大学短期大学部

学長 難 波 雅 紀

実践女子大学短期大学部は、「女性が社会を変える、世界を変える」という建学の精神に基づく教育により有為な人材を輩出し、社会の発展に大きく貢献してきた。1950年の創立以来、この間に世に送り出した卒業生は4万2千名を超える。

この75年の歴史を物語るファクトは、卒業生数の他にもたくさんある。その一つに、本号で最終号となる『実践女子大学短期大学部紀要』がある。そもそも「紀」とは「順序を立てて記す」とか「要」といった意味であり、「要」は「大切な物ごとのしめくりとなる大事な所」を指す。そこから転じて、紀要とは「事がらの要点を記したもの」、そして「大学・研究所などで刊行する、研究論文を収載した定期刊行物」を表すようになる。

現在の『実践女子大学短期大学部紀要』の前身は『実践女子短大評論』で、1978年3月の創刊号には、「型にとらわれないで、文科・家政の総合的見地からすすめてみたい」との方針が表明されている。その後、2002年3月刊行の第23号から『実践女子短期大学紀要』に名称を変更したが、その号では、「評論から紀要への変革は、短期大学紀要としての明確な位置付けと内容を示すもの」であり、「紀要という学術研究誌を標榜する名称に変わること、引き続き短大の存在を証明できる重要な使命を担っている」と述べられている。この使命は、『実践女子短期大学紀要』が今日の短期大学部紀要となっても脈々と引き継がれてきた。

そもそも学問研究は、研究者個人の中に閉じられるものではない。成果は社会に資するよう公に問われるべきものである。その公開の場が紀要なのであり、研究者は、紀要の場をとおして自らの力を知り、その反応を吸収して研究をさらに高めていかなければならない。

『実践女子短大評論』から始まり、『実践女子短期大学紀要』を経て、本号で最終となる第46号『実践女子短期大学部紀要』に至る足跡もまた、本学短期大学部における研究の歴史、すなわち教員の弛まぬ努力を物語る、紛れもないファクトなのである。